

経済論叢 章大経博論

第99巻第5号 1967.5
100 1 1967.7

ベルンシュタイン社会経済思想の生成

—「修正主義」の形成過程(1)—

久松俊一

I 修正主義の規定

これまでマルクス主義思想史のなかで、エドゥアルト・ベルンシュタイン Eduard Bernstein (1850—1932) の地位は、レーニンやローザ・ルクセンブルクに比して、ときにはカウツキーに比してすら、不当に低い評価しかあたえられなかった。それというのも、今世紀初頭の世界的大動乱期、すなわち第1次世界大戦とそれに続く一連のヨーロッパ革命のなかでつねにベルンシュタインの名と結びつけられる所謂「修正主義」がドイツ社会民主党(以下SPDと略す)を裏切りと挫折に導いたために、かれは所謂正統マルクス主義者たちから、思想的にも政治的にも断罪されてきたからである。そのために、その後の修正主義や所謂社会民主主義がすべて、ベルンシュタインのそれと結びつけられて語られる傾向をもったと言えよう。だが、はたしてベルンシュタインをこれらと同一視することができるであろうか。私は、この点について大きい問題がある、と考えるのである。

レーニンやローザについては、マルクス主義思想としてふさわしく、それぞれの思想を総体的にとらえ、それなりの評価があたえられるのに反して、ベルンシュタインについては、マルクス主義理論として個別科学的な諸側面がばらばらにとりあげられ、実践面についてもかれが部分的な社会改良に向かったために、社会主義実践に対立する単なる改良主義と評価されてきた。だが、一般にレーニンやローザのマルクス主義思想をつかむときとおなじく、ベルンシュタインの思想的個性をとらえるばあいにも、単に個別的な理論領域や日常的な実践の領域だけではその思想を全体としてとらえることはできない。私はもう一度、ベルンシュタインを歴史のなかで跡づけて、なぜかれが修正主義を打ち

起承

だしたのか、またそれはどのような思想に支えられて成立したのか、をそのゲネーシスにまで遡って検討してみたいと思うのである。

ところで、これまでのベルンシュタインの研究史のなかでかれを思想の次元にまで深めてとらえようとしたものはあったであろうか。党派的な敵意と憎悪をむきだしにしたイデオロギー批判を一応論外とすれば、近年わが国でも、わずかながらもすぐれた研究が現われてきている。思想史的または理論的にベルンシュタインに接近する¹⁾、あるいはSPDの歴史研究の一環として接近する²⁾の別はあっても、これらは次の点で共通している。すなわち、そこでは、ベルンシュタイン及びかれに代表される所謂「修正主義」が、19世紀末の社会的・経済的地盤変動に応じて社会主義運動内部に生じた必然的産物であり、その変化に理論的・実践的に対応しようとした限りで、その積極的意義は評価される。この点でこれらの研究のもたらした成果はたしかに大きかったと言えよう。だが、それらがいずれも、「戦争と革命」におけるSPDの裏切りと挫折から所謂「修正主義」を照らしだすという視角をとっているために、結局は、その源泉がベルンシュタインの理論に求められて、かれの政治的立場のためにかれの全思想が糾弾されてしまうということになるのである。これらの研究が、その接近の仕方の違いにも拘らず、一様に上のような結果に陥っているのには、方法上の原因があると考えられる。それは、ベルンシュタインと、「修正派」に一括される改良主義者たちとを、方法的に明確に区別していないという点にある。この区別を混同したために、無自覚のうちに、ベルンシュタイン「修正主義」思想を「修正派」運動のもたらした結果から見ることになってしまうのである³⁾。これがベルンシュタインをその思想的個性においてとらええないこ

- 1) 猪木正道, 社会民主主義の成立と発展, 「岩波講座現代思想」第4巻, 昭和32年, 149頁; 高島善哉・水田洋・平田清明「社会思想史概論」昭和37年, 267-310頁; 熊谷一男, ベルンシュタイン「修正主義論」の再検討, 「講座現代のイデオロギー」第4巻, 昭和37年, 109頁; 水田洋「現代とマルクス主義」昭和41年, 171-212頁。
- 2) 西尾孝明, ドイツ社会民主党における組織論の陥穽, 「政経論叢」第27巻第5号, 昭和33年12月, 148頁; 浅井啓高, ドイツ社会民主党史研究序説, 「経済系」第57集, 昭和38年, 42頁, 及び第59/60集, 昭和39年, 53頁; 西川正雄, ドイツ第2帝制における社会民主党, 「西歐世界と社会主義」年報政治学1966年版, 55頁。
- 3) きまざまな色合いをもった研究成果を一括してこのような批評を下すことには、たしかに無理

とは明らかであろう。かれが歴史にどのように対決していったかを内在的にとらえることによって始めて、われわれは、ベルンシュタインをその政治的立場から葬り去るのではなく、真にかれの思想を全体的につかむことができるのである。

このような視角に立ち、もっとも包括的でしたベルンシュタイン研究として、ピーター・ゲイ Peter Gay の著書が挙げられよう⁴⁾。かれは、現在の先進資本主義国における社会主義運動の直面している問題状況を、ベルンシュタインが当時対応した問題状況の延長上にとらえて、ベルンシュタインの思想を体系的に再検討しようとしている。だが、こうした緻密な研究に裏づけられた問題意識にも拘らず、かれは、1899年に公刊された『社会主義の前提と社会民主党の任務』 *Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie* を中心にして、思想の移り行く過程には無自覚なままで、ベルンシュタインの体系を、哲学、経済、政治の諸分野に、分類して再構成するという方法をとっているために、ベルンシュタインが、なにを、どのように問題にしたか、そしてどのような苦しい思想の営みのなかで自分の体系をうちたてていったか、を見失ってしまっているのである⁵⁾。ところが、ベルンシュタ

が伴う。事実、猪木、西川氏らは、ベルンシュタインと改良主義者たちとの相違に触れておられるし、平田、渡井、熊谷氏らは、ベルンシュタインその人の思想あるいは理論を分析しておられる。しかし色合いの違いはあるにせよ、いずれも方法論的にこの区別を立ててはおられないのであって、それは「戦争と革命」という歴史的な枠組みを前提としている（たとえば、渡井、前掲論文、42頁、等参照）結果ではないだろうか、と私は思うのである。伏稿第3節で考察を加える予定であるが、ベルンシュタインを思想の全体像においてとらえる場合には、かれは、現在にまで連なる普遍的な問題をマルクス主義の中で提起したのではないだろうか。私がこれらのすぐれた研究から多くの教えを受けながらも、なお不満を禁じえなかったとすれば、まさにこの点に理由がある。なお、ベルンシュタインに思想的に対決して大きな評価を与え、かれを20世紀の思想の中に位置づけておられる清水幾太郎氏の最近の著作（『現代思想』昭和41年、66-100頁）には大きな示唆をえたが、その評価の仕方には私との間に大きな相違がある。この点については、私は本稿及び次稿の全体を通じて明らかにしたいと思う。

4) P. Gay, *The Dilemma of Democratic Socialism, Eduard Bernstein's Challenge to Marx*, New York, 1952.

5) ゲイは、この体系化過程をむしろ伝記的に取扱っているために、ベルンシュタインがなにをどのように問題にしたかを、とちえそこなっている（*ibid.*, SS. 54-69）。この点を批判して、SPDの「理論と実践の分裂」を問題の中心においてベルンシュタインをとらえようとしたのがC. グノイスであるが、しかしかれは、それを専らエンゲルスとの関係において見ようとしているために、ベルンシュタイン自身の思想形成をとらえるという視点を失っているのである（Vgl. C. Gne-

インの「修正主義」思想にも生成と発展の歴史がある。そして、哲学・経済・政治といった領域分類の不能な生成期の混沌のなかにあつて、しかも自らの受けとめた現実の重みに対して凝縮させた思想のなかにこそ、ベルンシュタイン「修正主義」の生きた全体が現われているのである。だから、ベルンシュタインを生き生きとした思想家としてとらえるためには、われわれはまず、かれがどのような問題意識によって自らの思想を出立させたか、その思想のゲネーシスにたちかえる必要があるだろう。にもかかわらず、ゲイは1893-98年という体系化される以前のベルンシュタインを軽視している。それではベルンシュタインを全体性においてとらえることはできないのである。歴史的にベルンシュタインの思想を迎えることによって、われわれはかえってかれの体系をダイナミックにつかむことができるはずである。

以上述べてきたように、この小論は、所謂「修正主義」のなかでベルンシュタインを他の修正主義者たちと区別すること、そしてベルンシュタイン「修正主義」のゲネーシスを対象とすること、この方法を採用のものである。

ところで、こうした方法を採用からといって、私は決してベルンシュタインの体系そのものを無視しているわけではない。ただ次のような理由から私は、『前提』で成立する体系を直接には対象としないだけである。第1に、一旦確立された体系には固有の硬直性があり、しかもベルンシュタインの『前提』は、「百科全書的」⁶⁾と冷笑されるようにきわめて網羅的構成をとっているために、体系内部の有機的連関が把握されにくいこと、いいかえれば、体系全体を支える核心が不鮮明であること、第2に、ベルンシュタインは、マルクス主義政党の内からマルクス主義を批判し修正するというネガティブな形で、従って、その否定性を極度に強調するという形でその思想を展開したために、かれの思想

uss, Um den Einklang von Theorie und Praxis, Eduard Bernstein und der Revisionismus, in *Marxismus-Studien*, II, 1957).

6) この言葉は、カウツキーがかれのベルンシュタイン批判 „Bernstein und das sozialdemokratische Programm, Eine Antikritik“ (山川均訳「マルキシズム修正の駁論」昭和3年、春秋社)の中で用いたものであるが、レーニンもその書評で引用している。参照、大月版「レーニン全集」第4巻、205頁。

はたえず誤解され、歪曲されて受け取られ易いこと——一旦確立された体系そのものを対象とすることから生じるこのような困難に対して、ベルンシュタインがそれまでの自分を否定し克服していく生成期にはもっともポジティブな思想が表現されており、それをもう一度復原し再構成することによって、これ以後のかれの思想体系に対するわれわれの分析の視座を確立できるのである。事実、ベルンシュタイン本来のポジティブな問題提起と、その思想のもっていた可能性は、98年以降の論争のなかで芽をつみとられ、事態の客観的論理にしたがって歪曲が拡大されていくのである⁷⁾。ゆえに、ベルンシュタイン「修正主義」の生成過程に内在し、追思惟することによって、その後のベルンシュタイン「修正主義」の迎った運命に対する視座が開かれ、こうして、それをマルクス主義思想の大きな流れのなかに正しく——かれの理論的・政治的限界の指摘をふくめて——位置づけることができるのである。ここにはじめて、ベルンシュタイン「修正主義」思想の可能性を——そして、われわれに向かってつきつけられる問題性を、問うこともできよう。この小論は、そのような〈問い〉に対して、共通の地平を開こうとする試みである。

II ベルンシュタイン「修正主義」の端緒

19世紀最後のほぼ10年のあいだに、ベルンシュタインは、第2の亡命地ロンドンで、のちに「修正主義」と名づけられた思想を、一步一步展開していったのであるが⁸⁾、私の本節での課題は、その端緒形態を確かめることにある。そのためには、私はまず、90年代初めにかれが直面した問題状況を、80年代のSPDに潜んでいた問題にたちかえって、歴史的に跡づけてみたい。それによって、ベルンシュタインの問題の受けとめ方、あるいは対決の仕方の意味が明らかになるであろう。

7) この所謂修正主義論争では、かつての急進的党指導者ベルンシュタインの「変節」に対する感情的反駁からの倫理的批判が主流を占め、ゲイも指摘するように、理論的・思想的には裏りが少なかった(*op. cit.*, p. 62 ff.)。従って、批判者のなかで、かれの提起した問題の重要性を認識したのもなく、専ら党への裏切りとしてしか受け取らなかったのである。

8) この10年がベルンシュタイン「修正主義」にとって決定的な意味をもつことについては、前掲のゲイ及びグノイスを参照のこと。

かになるであろう。そして、こうした手続きを通して、ベルンシュタイン「修正主義」の端緒の姿をはっきりと示すことができるのである。

1878年、社会主義者鎮圧法を成立させるや、ただちにビスマルクは労働者・社会主義者への苛烈な弾圧に着手し、その後1890年に同法が廃止されるまで、SPDは長い困難な闘いを強いられたのであった。だが、一般にこの圧迫によってかえって労働者の階級意識が強まり、連帯感が生みだされたと評価されている。事実、この間、一方でありとあらゆる合法形態でカムフラージされて労働者組織が伸長し⁹⁾、他方、SPDも81年の例外法下最初の帝国議会選挙で31.2万票をえて生きのび、以後84年には55万、87年には76.3万と着実に伸び、90年2月の選挙では142.7万票をえて、ついにビスマルク退陣、例外法廃止にまで追い込んだのである。この限りでは、まことにメーリングの言う如く、この12年間は「プロレタリア英雄時代」¹⁰⁾であったと言えよう。

だが、これは事態の一面を示すものでしかなく、歴史は決してそんな単純な論理を辿るものではない。例外法下の社会民主党といえども例外ではなかった。ここでは、問題を党内関係のはらむ矛盾という点に絞って、SPDが90年の新しい事態をどのようにして迎えたかを簡単に追ってみたい¹¹⁾。

社会主義者鎮圧法は、大衆組織は禁止したが、合法的な議会活動を禁じはしなかったので、党の公式的活動は、当然ながら議会へと収斂することになった。こうして、SPDの帝国議会フラクションは、党の内部で少数にすぎなかったにも拘らず、党の政治意志を決定する上で大きな役割を果たす道が開かれた。だから、例外法の時代を通じて、急進的党員及びかれらを代表する幾人かの指導者と、多数派代議士とのあいだに、党代議士の任務の本質と限界について小さな争いが絶えなかったのである。議会フラクションへの批判は、すでに1878

9) H. Warnke, *Überblick über die Geschichte der deutschen Gewerkschaftsbewegung*, 2. Aufl., 1952, 池上幹徳・佐藤重雄訳「ドイツ労働組合運動小史」昭和29年, 34頁。

10) F. Mehring, *Geschichte der deutschen Sozialdemokratie*, Vierter Band, Achte und neunte Aufl., 1919, S. 327.

11) 党内矛盾に照明をあてるという視点から1890年に至るまでのSPDを跡づけているのが、次に挙げるブランドスの小著である。本誌65頁までの私の叙述は、主としてこれによっている。K. Brandis, *Die deutsche Sozialdemokratie bis zum Fall des Sozialistengesetzes*, Leipzig, 1931.

—81年の保護関税政策、祖国防衛問題へのかれらの態度をめぐって現われていたが、84—85年の汽船補助金問題を契機として、この対立は激化し、例外法下最大の論争となったのである。

論争は、亡命地チューリッヒでベルンシュタインの編集する党機関紙『ゾチアール・デモクラート』の議会フラクシオン多数派批判に端を発し、ベーベル、フォルマルといった若干の急進的指導者がベルンシュタインを援護する形で展開した。ここでの論議の中心は、党政策そのものよりもむしろ議会活動の評価及び党内における議会フラクシオンの地位についてであり、このなかで、ドイツ各地に反議会主義ムードが巻き起こったのである。このムードを鋭く表現しているものの1つに、フランクフルトの下部黨員からの呼びかけがある。かれらの主張は、要するに、議会フラクシオンの自立化に伴う中核黨員と代議士との断絶、代議士の右翼化と汽船補助金問題に暴露されたような「場当りの反対政策」、そして議会活動による党の革命的原則の侵害、を弾劾したものであった。しかし、こうした急進派とフラクシオン右翼多数派との対立という事態も、『ゾチアール・デモクラート』と多数派との妥協によって、党内分裂にまで進むことを免れたのである。だがこの妥協には、急進的指導者たちを指導していたエンゲルスの意向が強く働いていたと考えられる。84年6月5日、かれはベルンシュタインに宛ててこう書いている。「この連中（議員多数派）は、社会主義者鎮圧法のおかげでくらしている。明日にも言論が自由になれば、ぼくはすぐにもかれらに打ってかかり、たちまちやっつけてしまうのだが。しかし、言論の自由がなく、ドイツで印刷されている新聞全部をかれらが支配しており、おしゃべり、陰謀、かげ口をフルに利用する可能性をかれらに与えているかぎり、我々は、分裂、すなわち分裂の責任がかかるようなことをすべて避けなければならない、と思う¹²⁾（傍点筆者）と。こうしたエンゲルスの言葉に示されていることは、当時の急進的指導部には、暗黙のうちに1つの状況認識が前提されていたということである。それは、すなわち、大衆組織と社会主義的行動

12) 「マルクス=エンゲルス選集」大月書店、第17巻、285頁。

を弾圧しながら、唯一可能な合法的活動の場として議会を残しておくという、例外法下の異常事態こそが、党内民主主義を阻害し、議会フラクシオンへの過度の指導権集中とかれらの右傾化をもたらした、という認識である。だがこれに反して、各地の工業都市を中心として澎湃として起こった批判は、フランクフルトの黨員の呼びかけに見られるように、議会フラクシオンの自立化、右傾化の原因を、議会主義そのものに求めたものであった。このように、ビスマルクに飽をしゃぶらせられた議会フラクシオン多数派にたいする急進的批判のなかにも、指導層と都市の下部黨員との間には、明確な相違があったのである。すなわち、前者が、かれらを異常事態の特殊の産物と見たのに反し、後者は、議会活動そのものの必然的産物と見たのである。

ところで、87年の選挙をひかえて、ビスマルクは再び飽から鞭へと政策を転換した。このため、SPDの右翼グループはその存在理由を失い、選挙での大成果に立って開かれたザンクト・ガレン党大会では、リープクネヒト=ベーベルの急進的指導者たちのヘゲモニーが確立された。だが、この大会で注目すべきことは、指導部が下部の急進ムードとはっきり一線を画したことであり、大会決議は、議会活動の一定の役割を承認し、無政府主義的戦術に仮借なき批判を行なったのである¹³⁾。これによって、同じく急進主義を唱えていても、党指導部と一種の非合法的党内組織の形成を余儀なくされていた都市の下部黨員との相違は歴然とした。たとえばM. シッペルに代表されるような都市急進主義者たちは、議会を宣伝の場としてのみ認め、リベラルとの妥協を必要とする地方議会への参加を拒否し、弾圧強化のなかで、その反議会主義・非妥協主義をますます尖鋭にしていたのである¹⁴⁾。

こうしたなかで、90年、党は「すべての期待を遙かに凌駕する」ほぼ143万の選挙得票をえて、ビスマルク体制の破綻を決定的なものとしたのである。このビスマルク体制崩壊には、一面たしかにSPDの急進的立場もあずかっ

13) Mehring, a. a. O., S. 298; 及び、前掲浅井論文、「経済系」第57集、48頁。

14) Brandis, a. a. O., S. 95.

るにしても、むしろ選挙において支持大衆の増大として現われたような、議会主義の成果という側面の方が大きかったと言えよう。だが、党指導部においては、この後者の側面は決して自覚的には問題とされなかった。つまり、通常「理論と実践の分裂」¹⁵⁾あるいは「理論と政策の媒介論理の欠如」¹⁶⁾と批判される新綱領(エルフルト綱領, 91年)の性格は、そして所謂「急進的」な党指導部の性格は、例外法の刻印を受けた党内矛盾への無自覚の結果なのであった。したがって、新体制に面して現われた2つの潮流、つまり議会主義・党機構の寡頭支配の傾向、党の小ブルジョア化の傾向との闘争を掲げて登場した「若手組」と、バイエルン(南ドイツ)での実践を踏まえて登場したフォルマルの改良主義とは、まさしくこの矛盾の直接的かつ無自覚的な現われに外ならなかった¹⁷⁾。これが、90年代初めにSPDの直面した問題状況である。

さて、いまやわれわれは、こうした状況にベルンシュタインがどう対決したかを見なければならぬ。

かれは、93年に2つの小論を発表し、そのなかで一貫して無政府主義批判という方法をとりながら、自己の姿勢を明らかにしていった。90年から93年に至る間、党は、帝国議会での勢力を更に伸ばし(93年選挙, 178.7万票)、一方で「若手組」を排除し、他方でフォルマルとの妥協を行なったのであるが¹⁸⁾、この両者の党指導部批判を自覚的に受けとめたのは、ほとんどベルンシュタイン以外になかったと言えよう。つまり、かれによれば、これらの批判は実践の経験に支えられており、すでに例外法下において醸成されてきた問題が「新たな事態」に直面して顕現してきたものに外ならなかった¹⁹⁾。とりわけ、かれは「若手組」登場の必然性を自覚しており、それ故にこそ「若手組」をも含む無政府主義・半無政府主義的分子への根底的批判を必要としたのである。こうしてかれは、

15) Gneuss, a. a. O., S. 199.

16) 浅井, 前掲論文, 59頁。同様の指摘は他にも多い。たとえば、西川, 前掲論文, 63-64頁; 西尾, 前掲論文, 160頁, など。

17) のちの党史のなかで、ベルンシュタインはこの両者が党そのものの「二重性」の現われであるとしてとらえている。E. Bernstein, *Von der Sekte zur Partei*, 1911, S. 29.

18) 西川, 前掲論文, 65-66頁。

19) 註17)を参照。

新しい問題状況を次のようにとらえ返した——つまり、選挙成果に現われたように、ドイツ社会主義運動が広範な大衆基盤をえて社会に定着しつつあるという既成事実をどのように評価し、これを社会主義理論にどうくみこむか、そして、SPDはこの運動にいかなる形態を与えうるか、と。「若手組」と改良主義が、逆方向ながらも、ともにこの新しい状況への直接的対応だとすれば、ベルンシュタインの場合は媒介された対応であったと言えよう。さて、かれは、特殊ドイツの状況にあってSPD独自の戦術の可能性を問い、理論を展開するのであるが、その際まず、無政府主義を批判しながら、第2インターナショナルの組織原則を確認することから始める。かれによれば、「無政府主義者には、歴史もなければ発展もないし、諸連関における区別への顧慮もない。一民族がどんな発展状態に達しているにせよ、また労働者や社会主義者がどんな状態の下で闘わねばならないにせよ、そんなこととは関係なしに、……全ゆる時代、全ゆる国に妥当する手段と方法が主張される。ゆえに、それはまた、絶対的に不毛である。」²⁰⁾だから、第2インターナショナルは、多様な発展段階にある各国社会主義運動の自立性を媒介にした統一であるべきであって、決して、画一的な戦術を押しつけるべきではない。つまり、第2インターナショナルは、各国社会主義運動の「自己決定権」を組織原則とするのである²¹⁾。周知の通り、こうした主張は当時のドイツ・マルクス主義者に共通のものであって、ベルンシュタインはまずそれを再確認したのである。

それでは、ビスマルク体制からヴィルヘルムⅡの社会宥和的な新体制への転換によって、党の合法化、選挙での大飛躍といった新しい事態を迎えたSPD独自のあり方とはどのようなものであろうか。ベルンシュタインは、それを、第1)に党の戦術上の原則として、議会主義に立った同盟・妥協戦術を提起することによって、第2)に党の戦略目標として、プロイセン三階級選挙制度を立て

20) E. Bernstein, *Die Grenzen der Leistungsfähigkeit internationaler Congresse*, 1893, in *Zur Theorie und Geschichte des Socialismus*, Teil II: Probleme des Socialismus, Vierte Aufl., Berlin, 1904, S. 7 (以下「Grenzen」と略す)。

21) a. a. O., SS. 10-11.

ることによって展開する。だが、こうした提案の底には、つねに現実の基盤に立って、党の機能を社会主義運動のためにもっとも有効に働かせようとする意図があったのである。だから、かれは選挙における党支持者の増大をそのまま礼讃したりはしない。それは、広範な社会主義的大衆の存在を示し、運動の可能性を開く条件ではあっても、党組織の拡大だけで十分なのではない。問題は、こうした大衆と党を有機的に統一すること、いいかえれば組織の末端に至るまで生命を吹込むことによって党機能を有効に働かせることなのである。だからこそ、かれはドグマによって運動から生命を奪い組織を硬直させる無政府主義の分子に批判を集中したのである。この確認のうえに立って、まず第1の戦術の原則について見よう²²⁾。SPDは、たえず組織成長が進み、他のブルジョア諸党と伍して自立しうるヨーロッパ最大の社会主義政党である。この組織成長が妥協戦術を可能にする。というのも、党の組織が拡大すると、「その目標が自覚され、他政党との関係が意識に上るように」なり、また階級の使命が自覚されるようになるので、妥協・同盟が党に与える危険は減少するからである。したがって、無原則な妥協・同盟は拒否すべきではあるが、しかし少くとも、党は教条的に一切の妥協・同盟を排するという態度をとるべきでない。こうして、組織成長を所与のものとして認めて、なおそれに生き生きとした活動形態を与えるための一般的原則として、妥協戦術が提起されたのである。このように、ベルンシュタインは大衆的基盤をえた社会主義という新しい未知の事態を主体的に受けとめたのだが、第2に、それを反プロイセン三階級選挙制闘争という場を設定することによって具体化するのである²³⁾。ドイツ帝国を指導するプロイセン邦は、また「主農派的・工業封建主義の王領」であり、その三階級選挙制度は、社会主義運動に鉄の障壁をなしている。それは、組織的に成長したSPDの力を殺ぎ、大きな制約をなすものであるが、しかし逆に、広範な労働者大衆に支えられたSPDにしてはじめて、それを打破する可能性をもち

22) a. a. O., S. 10; 及び, Bernstein, „Die preußischen Landtagswahlen und die Sozialdemokratie“, *Die Neue Zeit*, 11. Jg., 2, S. 775 (以下 „preußischen Landtagswahlen“ と略す)。

23) 以下のプロイセン問題の叙述は, Bernstein, „preußischen Landtagswahlen“ による。

うるのである。「いまや修練を経て力強く成長した党」であるからこそ、選挙における煽動・同盟、議会活動による改良といった議会主義が成果を挙げうるのである。だが、プロイセン選挙闘争は、まさに議会主義があれこれの単なる改良に尽きるのでなく、より攻撃的性格をもつことをも示している。なぜなら、三階級選挙制こそ反動体制の楯杆であり、ゆえにまた、それを改良することは、とりもなおさず体制そのものの突破口となりうるからである。だから選挙に参加し、煽動、攻撃、あるいは政治的同盟など「活潑に行動することによって、党は三階級選挙制という壁を打破し、プロイセン邦議会における党事情を本質的に変化させうる可能性が、たとえ僅かであっても存在するのである。」²⁴⁾ こうして、ベルンシュタインは、それまでの党の選挙ボイコット政策を批判し、反動体制の拠点プロイセン邦議会に参加し、議会主義を徹底させることによって、厚い壁を破るという道を求めたのである。ここにわれわれは、かれの〈戦闘的〉とも言える議会主義の特徴を見ることができよう。こうして、かれは、SPDにおける〈議会主義〉の位置を明らかにしたのである。

以上みてきたように〈93年段階のベルンシュタイン〉は、たしかに戦術問題を提議したにすぎず、また無政府主義批判あるいはプロイセン問題についても、エンゲルスと軌を一にしていたのである²⁵⁾。しかし、私は、次のような相互に関連する諸点のなかに、かれの「修正主義」の端緒が見出されると考えるのである。第1に、無政府主義批判がその教条主義に向けられる限り、論理的には教条的に受容された〈党のマルクス主義理論〉批判への道は準備されていること、第2に、必ずしも党そのものを批判対象としているのではないが、すでに経済破局の切迫を仮定した〈待機主義〉批判が行なわれており、後の所謂正統マルクス主義者への批判の原型が示されていること、そして第3に、社会主義運動において日常的活動形態を理論化しようとして〈議会主義〉という手段を

24) a. a. O., S. 578.

25) エンゲルスの無政府主義分子への批判に関しては、「マル・エン選集」第17巻、176頁以下、及び355頁以下を、またプロイセン問題については、「選集」同巻、428頁以下を参照されたい。なお晩年のエンゲルスに光をあてた好論文として、平田清明、晩年のエンゲルス、「経済科学」K. 3, 昭和37年6月、を挙げておきたい。

徹底したこと、である。

まず第1の点について見よう。ベルンシュタインが無政府主義者を批判するのは、かれらが一定の命題を絶対化してひたすら墨守するからであるが、しかしかれは、こうした批判が直ちに自己に跳ね返ってくることを知っていた。社会主義には類似の教条主義が空想主義時代からの遺産としてまだその血の中に潜んでおり、「われわれはみんな、いくらかは合目的性の問題から原理のようなものを作りだし、一定の関係にとって正しく思われるものを全ゆる関係にまで拡大しようとする傾向がある。」²⁶⁾ こうして、自己の内なる無政府主義的要素に批判の鋒先を向けるという自己否定的かつ潔癖な思想態度が、カウツキーに代表される党の公式マルクス主義批判へと向うのは、論理の必然であろう。いまやかれは、「一切のものをぜがひでも窮屈な図式におしこめ」ようとする、教条主義者=所謂「マルクス主義者」を否定するのである²⁷⁾。

次に第2の点について。ベルンシュタインはすでに、戦術における〈非妥協主義〉が理論上のドグマと表裏の関係にあることを予感している。プロイセン問題を述べたところで、かれはこう言っている。「三階級選挙制度は不合理であるから、間近に迫った破局と共に急速に崩壊するだろう、という仮定は、全くのオプティミズムである。むしろそれは、ブルジョア社会の最後の審判の日まで存続する可能性が強い。……だが、この最後の日が間近に切迫し、そしてさながらひとりで現われてくるかのように表象している人々にとっては、万事それで片が付いてしまうのであろう」²⁸⁾ と。ここには「正統」と自任する党の公式のマルクス主義へのもっとも明瞭な批判の芽があると言えよう。

最後に第3の点について。上の2点がいずれもネガティブな形式をとっているのに対し、かれがポジティブに展開しようとしたのは、〈日常的闘争形態〉をどのように社会主義運動のなかに位置づけるか、ということであった。たしかに「日々変化する情勢や状況を、日和見主義的に……過大評価する危険」を

26) Bernstein, „Grenzen“, S. 7.

27) a. a. O., S. 12.

28) Bernstein, „preußischen Landtagswahlen“, SS. 773-774.

免れるためには、つねに「究極目標を見ずえていなければならない。」²⁹⁾ だが、単なる「場当たり政策」は拒否するべきであるとはいえ、極限状態における最後の行為としてこそふさわしいものを「全ゆる事態に対して、全ゆる状況の下で適用しようとする政策」はいっそう否定されねばならない³⁰⁾。そうした行為は、組織と運動を硬直させはしても、決して現実の闘争を媒介するものではないからである。こうしてかれは、運動に生命を与える現実的な鍵を日常闘争に求め、これを〈議会主義〉として規定したのである。勿論、かれは「党が議会活動に埋没して大衆の自己活動を軽視したり……目的へ至るための手段である議会主義を自己目的……とする危険」³¹⁾を熟知している。だが現実には、議会活動なしには運動は前進しない。この五分と五分の緊張関係において、かれは〈議会主義〉をとったのである。すでに見たように、「主農派的・工業封建主義の王領」たるプロイセンを戦略目標として立てたとき、革命的方法が議会主義的方法かは、現実には迫られた二者択一の問題となる。そして、ここで〈徹底的議会主義〉をとったことがベルンシュタインの以後の思想展開の基軸となったのである。

以上3点にわたった分析から、私は、ここにベルンシュタイン「修正主義」思想の端緒を見るのである。

Ⅲ 経済構造の変化と事実認識

ここで私は、1896—98年にSPDの理論機関誌『ノイエ・ツァイト』に発表された一連の論文³²⁾——『社会主義の諸問題』という共通題目をもった諸論文を中心にした——を対象として、前節で析出したベルンシュタイン「修正主義」

29) 30) Bernstein, „Grenzen“, S. 12.

31) Bernstein, „preußischen Landtagswahlen“, S. 777.

32) 私が本節及び次稿第1節、第1節で対象とする論文は、次の5つである。ここであらかじめそれらの論文名を記しておく。① „Klassenkampf und Kompromiß“, N. Z., 15. Jg., Bd. 1. ② „Allgemeines über Utopismus und Eklektizismus“, N. Z., 1896/97, 15. Jg., Bd. 1. ③ „Die neue Entwicklung der Agrarverhältnisse in England“, N. Z., 1896/97, 15. Jg., Bd. 1. ④ „Die sozialpolitische Bedeutung von Raum und Zahl“, N. Z., 1896/97, 15. Jg., Bd. 2. ⑤ „Der Kampf der Sozialdemokratie und die Revolution der Gesellschaft—Zusammenbruchstheorie und Kolonialpolitik“, N. Z., 1897/98, 16. Jg., Bd. 1. このうち、Probleme des Sozialismus という共通題目をもった論文は、②③④である。なおこれらすべては、Zur Theorie und Geschichte des Sozialismus, II. に収録されているので、以下の引用は、すべてこの論文集のページ数で示すことにする。

の端緒が、どのように深化・展開されるかをとらえたい。

「邦議会は、今日では反動諸党の防壁であり、労働運動への攻撃拠点である。この壁をそのままにしておいていいものだろうか」³³⁾と、かれは再び問う。3年前(1893年)の提言で、かれは、党の選挙ポイコット政策を批判し、その最後にこう書いた。「われわれが今まで何もしなかったことの理由が、これからも永遠に何もしないことのある確かな理由となるものではない。昨日理性であったことが、今日は不合理となることもありうるのだ」³⁴⁾と。だが、一体誰がこの提案を真面目にとりあげ、「より良いものにしようと努力してきたらどうか?」——誰も、³⁵⁾こうしてかれの批判は、もはや無政府主義分子にではなくて、明確に党指導部へと、すなわち「教義の前提となっているもののなかに、何か本質的な変化がおこったのだということ認めようとしなさい」³⁶⁾ 教条的・革命主義者へと向かう。そして、その「客体世界における本質的変化」を明らめようとする。だがこの過程は、それまで漠然たる予感として、あるいは直観としてとらえられていた、党と現実世界との亀裂を、自らの意識に刻印していく苦しい作業でもあった。

〈ドイツ社会主義運動に対する危機意識〉——ベルンシュタインを内から衝き動かしていたものは、まさしくこれであった。まず本節で私は、ベルンシュタイン「修正主義」の体系化過程が、かれの危機意識を内的動因としていたことを明らかにし、次稿第1節であらためてその構造を問題としてとりあげたい、と思う。

さて、1896年以後になってはじめて論文という形をとりはしたが、しかしそこに至るまでには内的葛藤があった。1893年の2論文は、あくまで社会主義運動の主体的条件における〈新しい事態〉の認識と、それに応じた戦術提起であったが、すでにその中に、前節で見たように、ドグマ化したマルクス主義への批判の芽があった。客観的経済過程にも新たな変化が起こりつつあること、そしてそれに対するマルクス経済学の有効性を確信できなくなったこと、ここに

33) Bernstein, „Klassenkampf und Kompromiß“, S. 27 (以下 „Klassenkampf“ と略す)。

34) Bernstein, „preussischen Landtagswahlen“, S. 778。

35) Bernstein, „Klassenkampf“, S. 27。なお、この93年の提言を強く支持したのがラディカリストのバルルスであったという興味深い事実がある。参照、山口和男、ドイツ社会民主党急進派の革命思想、「思想」第497号、昭和40年11月、44頁以下。

ベルンシュタインの動揺が生じた。

1891—93年、ベルンシュタインは、リベラルの経済学者シュルツェ・ゲフェーニッツとユリウス・ヴォルフのマルクス理論批判に反論を加えた。かれらは、いづれも、社会民主党内に広く行きわたっていた見解——つまり、資本制生産は人民大衆の貧困を増大し、資本制経済は自らの矛盾のために没落するに違いない、という見解——に異論を唱え、とりわけ全面攻撃を展開したヴォルフの著書は、マルクス及びかれの理論に支えられたSPDの新綱領への異論の余地なき反駁としてブルジョア新聞に賞讃された³⁷⁾。ベルンシュタインは、とにかくかれの批判のなかで両者の欠陥を証明することはできた。「しかし当時すでに私は、その批判によって、かれらの出した異議がすっかり片づいたわけではないということを、自分に隠しはしなかった。……それまで自明のことだと考えていた命題に疑問が生じたのである。」³⁸⁾

だが翌94年には、この疑いをいっそう強めるようなことがいくつかおこった³⁹⁾。第①は、SPD内におこった農業問題論争である。その経過において、エルフルト綱領に言うように、農民を「没落しつつある中間層」の1つと規定することは、現実には、まったく大きな条件つきでしか認められないことがいっそうはっきりと認識されるようになったのである。第②は、マルクス『資本論』第3巻の公刊である。ここでは、ベルンシュタインは、第1巻で展開された価値論が具体化されていないことに失望し、また資本諸機能の叙述が進むにつれてブルジョア経済学と大して変わらない立場に近づいているという印象を受けたのである。第③に、ヨーロッパ、とりわけドイツでは景気が上昇しつつある、という事情があった。のちにかれが述懐するように、かれの社会主義思想に深い影響をあたえたのは、まさしくこれらの〈事実〉であった⁴⁰⁾。「いかなる理論

36) Bernstein, „Zusammenbruchstheorie und Kolonialpolitik“, S. 82 (以下 „Zusammenbruchstheorie“ と略す)。

37) Bernstein, Entwicklungsgang eines Sozialisten, in Die Volkswirtschaftslehre in Selbstdarstellungen, 1924, S. 21。

38) Ebenda。

39) a. a. O., SS. 21—22, 25。

40) a. a. O., S. 23。

にとっても、事実の発展過程についてそのつど研究していくことの重要性」⁴¹⁾を確信していたベルンシュタインは、いまや経済理論そのものの検討に向かわざるをえない。そして、その行きつく先に対する予感がかれを苦しめた。この内面の闘いが、かれを愛想のいい人間から不機嫌な人間にし、またすべてのことから逃げだそうと考えて、一度はトランスヴァールに銀行員の職を求めさせた⁴²⁾。だが、理論が党の実践を規制しているかぎり、たとえマルクス=エンゲルスの理論の批判的検討という形をとるにしても、それを避けることはできない。このような切実な問題意識がかれの理論的苦闘のなかで一步一步成熟し結実していく過程——これを、われわれは『社会主義の諸問題』を中心とする一連の論文のなかに見出すことができよう。

ベルンシュタインは、まずSPDの理論的前提となっている所謂「崩壊理論」を問題にする。それは、マルクス=エンゲルスの著作の断片をつなぎ合わせ、「すぐれて科学的な理論成果を教条的に受けとって」⁴³⁾、しかも現実のなかから都合のいい事実を寄せ集めて、あたかも確証されたかのようにふるまう見解である。すなわち、その見解とは——「窮乏によって暴力的な強さと拮がりをもった産業恐慌が、早晚非常に烈しい反資本主義経済体制の気分を燃え立たせ、……この体制に反対する運動が抗いがたい力をもって進展するなかで、この体制そのものが救いようのない仕方で崩壊する。換言すれば、不可避的な大経済恐慌が、すべてを包括する社会的危機にまで拡大する。そして、その危機の産み出すものこそ、目的意識をもった唯一の革命的階級であるプロレタリアートの政治支配であり、この階級の支配の下で遂行される完全な社会変革であるだろう」⁴⁴⁾というのである。しかもなお、かれらによれば、「もしその間に予見されない事件が生じたり、資本主義世界が新たな猶予を受けとったりしなかった

41) Bernstein, „Die neue Entwicklung der Agrarverhältnisse in England“, S. 41 (以下 „neue Entwicklung“ と略す)。

42) P. Gay, *op. cit.*, p. 60.

43) Bernstein, „Allgemeines über Utopismus und Eklektismus“, S. 34 (以下 „Utopismus“ と略す)。

44) Bernstein, „Zusammenbruchstheorie“, S. 83.

ら、この大恐慌はそんなに遠い先のことではない」⁴⁵⁾とされる。こうして、自然必然的に迫りくる破局の後の社会主義の究極勝利まで、「あらゆる問題解決が延期される」⁴⁶⁾ことになる。

94年に始まった農業綱領論争は、こうした党の公式理論への直接的な疑問提起であった⁴⁷⁾。ベルンシュタインも、93年のかれの提言を無視した党の硬直した戦術の基礎が、前述のような教条的理論のなかにあることを知り、96—98年の諸論文で反論を展開したのである。かれによれば、党の所謂「崩壊理論」の前提は次の2点にある。1つは、資本主義経済体制の生命力の衰亡=全面的経済恐慌の切迫であり、他は、窮乏せる労働者と富を集中せる資本家への二階級分解の進行と、それによる階級対立の尖鋭化、これである。

だが、はたして現実はそのような単純な姿をとっているだろうか。たとえば、1870年代以来の長期の農業恐慌がもっとも尖鋭な形をとって現われたイギリスではどうであったか。中規模経営の集約農法、畜産・果樹栽培への転換による市場関係への適応、独立農業者の比率の上での増大、地主対借地農、借地農対農業労働者の階級対立の緩和化——こうした変化のなかでイギリス農業が恐慌を克服しつつあるのだとすれば、これは農業における〈適応能力〉を示すものに外ならない⁴⁸⁾。このことはドイツの産業発展をとってみても同じである。第1に、工業においても「一方では、それまで小営業に特有だった経営が大工業に吸収・打倒され、他方では、大工業が産み出す新しい技術や新しい状況ののっかり、新しい中経営が形成され、……こうしてたえず産業種類が増大する」結果、工業は自己の姿を変え、あるいはカルテル・トラストといった企業家組織の拡大によって〈適応能力〉を増大させている。第2に、恐慌勃発のきっかけを排除し、あるいは弱体化させる重要な経済的要因として、「きわめて発達し拡大した近代信用や、日々高まっている交通の拮がりと便益」の調整機能が挙

45) a. a. O., S. 84.

46) Bernstein, „Utopismus“, S. 34.

47) 参照、山口和男、ドイツ社会民主党の農業論争、「思想」第490号、13頁。

48) Bernstein, „neue Entwicklung“, SS. 41—57.

げられる。このように、単に〈事実〉を認識しさえすれば、少くとも全面的恐慌の切迫が思弁の産物にすぎないことは明らかである⁴⁹⁾。だが同様に重要なことは、純客観過程が階級関係に及ぼす影響である。産業社会が複雑になり多様化すれば、階級関係も複雑になり、大資本家・地主対プロレタリアートという単純化に反する結果を示してくる。さらに「労働者も、団結法・保護法及び政治的選挙権によりますます多くの分前に与かる能力をえて以来、国富増大に利益をもつ」⁵⁰⁾ようになってきている。ここには決して、階級分化と階級対立の激化を見ることはできない。「歴史は型通りの発展はしないものである。歴史は、ただ方向を規定するところの発展傾向を示すのみであり、その傾向というのも完璧な形で貫徹することはない。」⁵¹⁾

以上のように、ベルンシュタインは恐慌切迫論と二階級分解論の誤謬を分析したのであるが、それは、固定されたマルクス理論の命題に反する〈事実〉を分析しただけであって、その意味では、きわめてネガティブな経済分析にすぎなかった。いいかえれば、かれの経済理論は、シュルツェ・ゲファーニッツやユリウス・ヴォルフのようなリベラルのマルクス批判を再確認するかのようなものでしかなかった。だが、それがどのような系譜をもつものであれ⁵²⁾、かれにとって切実な要求は、〈純客観的な現実世界がどのような姿をとっているか〉を確定することにあつたということ、これをわれわれは確認しておかねばならない。ベルンシュタインがこのように客観に固執したのは、とりも直さず、かれの主体的な実践意志から生まれているのである。かれはこう言っている——たとえそこに示される現実の相が運動にとって好ましいものではなくても「誤まった希望をつちかい、誤まった道へと誘う欺瞞を維持するよりか、苦い失望の方がよほど良い。……真理は、われわれに解決できる課題に全力を投入する

49) Bernstein, „Zusammenbruchstheorie“, SS. 84-90.

50) a. a. O., S. 96.

51) Bernstein, „neue Entwicklung“, S. 47.

52) ベルンシュタインの理論的系譜関係については、ゲイの前掲書が詳しいが、その他リークリもかれの系譜関係を重視している。Erika Rikli, *Der Revisionismus—Ein Revisionsversuch der deutschen marxistischen Theorie 1890-1914*, Zürich, 1936, SS. 15-16, 115-117.

ことを教えてくれる。そしてそれは、まだ解決の前提条件にさえ達していないのに、解決の完成が切迫しているかのように夢みることからわれわれを護ってくれる⁵³⁾と。たしかに〈事実〉とは、現実の意味連関から切り離されてそれだけでポジティブな意味をもつものではない。がしかし、1つの理論体系のカナメとなる事実に関しては、それはドグマ化した意味連関を断ち切るという点でネガティブではあっても〈敢然たる事実〉なのである。ベルンシュタインにおける〈事実認識〉とは、まさにこのようなものであつた⁵⁴⁾。

こうして党の掲げる教条的なマルクス主義理論を事実によって反証する過程で、ベルンシュタインの内面の動揺は、より鋭い危機意識にまで高まった。というのは、それによって、社会主義運動における党の認識と行動の前提条件が崩れ去るからである。真摯な社会主義者として、さらに何よりもドイツ社会民主党員として⁵⁵⁾、ベルンシュタインは、党の危機的状況を自己の内なる危機として、主体的に受けとめたのである。

では、かれの危機意識はどのような構造をもっていたのか——稿をあらためて究明することにしたい。(未完)

53) Bernstein, „neue Entwicklung“, SS. 56-57.

54) この点については、次稿第3章において、ベルンシュタインの思想の全体像との関わりでもう一度考察するつもりである。

55) ベルンシュタインの党への忠誠心については、ゲイの前掲書が詳細に実証しているので参照されたい。